

熊野の精神的世界の豊かさを教材にする

余 健*・山本 真吾**・鈴木 幹夫***

豊かな自然が残る熊野に焦点を当て、子供たちの「生きる力」の形成にも繋がる「精神的世界の豊かさ」の検討を行い、それを小学校の総合的な学習の授業等で使用可能なビデオ教材に反映させることを試みた。一口に「精神的世界の豊かさ」が実現される生活を目指す、と言っても、それが現代より色濃く実現されていた、かつてのような水道も電気もない時代に立ち戻る訳にはいかない。現代の「物質的な豊かさ」を上手く手段として生かすことで「精神的世界の豊かさ」を見直し、子供たちに「生きる力」を身に付けてもらうことが大事ではないかと考える。

キーワード：熊野、自然、豊かさ、生きる力、ガロボシ

1. はじめに

これまで教育現場では「確かな学力と豊かな心」を育むための取り組みがなされてきたが、特に後者の「豊かな心」は目に見えないこともあり、取り組みの難しさが指摘されている。そこで本研究では日本でも有数の多様性を誇る三重のこたばを対象に「精神的な豊かさ」を実感できるビデオ教材の作成を目指すに至り、「たこ揚げ」や「お手玉」等の遊び言葉に関する名称を確認する面接調査と自然談話調査の収録を行った。

本稿では後者の自然談話調査のデータに焦点を当て、当地の伝説から確認される「熊野の精神的な世界」の豊かさについてその特徴を検討し(2節)、それを小学校の総合的な学習等の授業で使用可能な教材に結びつけ、最終的には子供たちに生きる力を身に付けてもらうための具体的な方策を検討する(3、4節)。

2. 熊野地域の精神的な世界

(2-1) ここで考えたい豊かさとは

暉峻(1990)の著書『豊かさとは何か』における以下に示す結論部分には教育界においても考えるべき重要な意見の提起がある。すなわち「カネもうけ」、「モノを買うこと」という、持つことだけに表現できる豊かさではなく、(カネやモノを)持つことが、人間と人間との関わりを豊かにし、人間と自然との関わりを豊かにできるような豊かさを、私たちはどのように作り出していっていいのかを真剣に考え実現していきたいと思う」という暉峻氏の意見の提起である。この点を熊野における生活綴方教育で実践していると考えられる鈴木(2004)では、上述のような子供の成長に不可欠な「本来あるべき姿の豊かさ」を見直す上で、学校が地域社会の中で果たせる役割は大きい、と指摘されている。

余が担当する国語学演習CI、IIにおいても教育的にも重要なキーワードであるこの「本来あるべき姿の豊かさ」を求めて、2003年以来熊野でフィールドワークを

続けている。その中で収録された当地の伝説、「ガロボシ(河童)に引かれた子供の言い伝え」に「現代の効率社会における利益一辺倒の価値観の枠組みでは捉えられない豊かさ」の一端を垣間見ることができた。以下で具体的に確認する前にまず、自然談話調査の概要と話のあらすじを示す。

(2-2) (自然談話調査の概要)

収録年月日 2003年8月22日
収録場所 三重県熊野市飛鳥町
話者 植中逸香：女性 1934年生(当時69歳)
0-69 三重県熊野市飛鳥町神山
山本文子：女性 1928年生(当時75歳)
0-75 三重県熊野市飛鳥町神山
調査者 鈴木幹夫 富永千智
撮影者 余 健

(2-3) 『ガロボシ(河童)伝説—熊野市飛鳥町神山のお話—』

(話のあらすじ) 戦前まで、この地域(熊野市飛鳥町神山地区)では毎年7月15日に「大般若の日」と名打って、経典を虫干しする行事が行われていた。その際には、

* 三重大学教育学部国語教育

** 三重大学人文学部文化学科日本研究

*** 紀和町立入鹿小学校

地元の小学校からお参りを兼ねて参加していた。ところが、ある年の7月15日にこの行事に参加せず、大又川の不動淵に泳ぎに行った小学生が数人いて、その内の一人（現在、生きていたら95、6歳位の人）がガロボシにその淵の中に引かれて死んでしまった。引き上げられた遺体のお尻には、穴があいていたため、ガロボシに淵の中に引き込まれたものとして、迷信ではなく実際にあった話として、この地では言い継がれてきている。そのため、かつての7月15日には、ガロボシの好物である「キューリ」を食べてはいけない習慣があり、また周囲の農家でも「キューリ」を栽培していなかった（現在では数件を残して栽培するようになってきている）。また、子供がいる家庭では、子供の数だけ、初物の「キューリ」を川の淵に投げ入れ、「子供を守ってください」と祈ったそうである。



調査風景（左が山本さん、右が植中さん）

（2-4）「熊野の精神的な豊かさ」を感じられる談話箇所

以降では、『ガロボシ（河童）伝説—熊野市飛鳥町神山のお話—』の中で特に「熊野地域の精神的な豊かさ」を感じられる会話2箇所を選び出した。(1)、(2)共にビデオ教材の該当箇所も示している。

◎「熊野の精神的な豊かさ」を感じられる談話箇所(1)

※参照：ビデオ（1分27秒～3分12秒）

（談話内で表す記号）×××：聞き取り不可能箇所、
 ン：前鼻音（共通語の「ン」よりも時間的に短い「ン」）、
 ↓：下降調イントネーション、↑：上昇調イントネーション、…：間

（植中、以下U）：ソノ… コワ ヒキコマレタノワ
 ジューゴニチャッタンヤト↑ シチガツノ デ シ
 チガツノ ジューゴニチッテ ユータラネ↑

（富永、以下T）：ハイ

U：ウチノホーノ オテラ^ンデ ダイハンニヤッテユ

（大般若って言う）

T：ダイ…

U：オテラノ ギョーリアルンヤ↓

T：ハイ

U：ネ↑（山本、以下Y）Y氏に対して）

Y：ウン

U：^ンデ ソノ ^ンデ シチガツノ ジューゴニチニヤ
 カワイカレンッテ ^ンドモノコロ イワレタンヤ

T：ソノ シチガツノ ジューゴニチダケデスカ

U：ソーヤロネ ウン ^ンデ

Y：①カワイクトキャ キューリオ タベラレンッテ
 ユーテノー ホー ^ンデ ヒル^ンゴハンノ オカズ
 ニ ソノ キューリ デテモ タベント（笑い）

U：②^ンデ キューリヤネー↑ ウッチラ ナルヤロ↑
 ハジメ ハツナリオネ ^ンドモノ ^ンズンダケ
 ナガシタン カワエ（川へ）

T：コドモノ カズダケ

U：ウン ^ンドモワ フタリ オッテモ サンニン
 オッテモ サ↑ サンニンオッタ（3人いたら）
 ミツ ヒトリヤッタラ イッコネ↑ チサイ（小
 さい） キューリオ ホッテ（投げ入れて）マモッ
 テク^ンダサイッテユーテ（子供を守ってくださ
 いって言って） カワエ

U：^ンデ ソノ（ガロボシに引かれた）Mサン ③Mサ
 ャ ^ンデ アレヤケド（ささやき声で） ソノ カワ
 ヒッパレタッテユーノノ オンナジニ オヨギョッ
 テネ↑ ^ンデ ヒトリ トモ^ンダチャ オランダ ダ
 ラ ソノ カワノ コー アナニ ナットルトコエ
 ヒッパレテ シターノ（下の） ホッデ（方で）
 シバラクシテ ウイテキタ トキニヤ モー クワッ
 アラッテ（穴って） ユンカ オシリニ アナ ア
 イトッタンヤ↓ ^ンデ ソリヤ モ ジッサイニ アッ
 タハナシ^ンデ イマー ソノヒトラノ ミタヒトラ オッ
 タラ キュウジュウゴロク ヤノ↑（Y氏に対して）

◎「熊野の精神的な豊かさ」を感じられる談話箇所(2)

※参照：ビデオ（3分55秒～4分41秒）

S（鈴木、以下S）：メイシヤ メイシヤラッテユー
 ヨーナ カンジデモ（笑） ナインヤロ↑ ホ
 ントニ アッタ ハナシトシテ

Y：オー ホントノネ↑ ハイ

U：ハー ハー ハイ

S：ツタエテキタンヤロー↑

U：ソノ フドーサマデ ガロボシニ ヒカレタノモ
 ホントノ ハナシワ ネ↑（S氏を見て）メイシ
 ヤ ④ソノヒト（ガロボシに引かれたMさん）
 ノ ハカッテユーノワ ウチノハカノ ヨコノ ア
 レヤ（ささやき声で）
 ～中略～

S : ヤッパ シリノトコロニ オッキナ アナ
 U : アイトツタンヤッテ × (S氏に対して)
 S : イ イーック コドモラノハナシモ ソーヤモンナ
 ナンカ オヨイデアツタラ (泳いでいたら) コーモ
 ンカラ コー テー ツッコンデキテ ナイゾーッテ
 ユーカ キモ トツテクトカ ドートカッテ ウン
 U : ⑤ヤッパリ オッ アノー フミオラニモ マイラ
 ニモ ユータヨー アノ フドーサンワ オットシー
 ンヤド (恐ろしいんだぞ) イチバンシリマデ ミ
 ズアビオツタラ (水浴びしていたら) ガロボシニ
 ヒカレルゾー チューテサー↑ (S氏を見て)
 ハヤカ (だから) ヒトヨリ ハヨ アガッテコー
 ナアカンテ ユーテ
 S : ウーン
 Y : アー
 U : ⑥メーシンジャ… ナイ イイツタエ×××
 Y : ⑦メーシンジャナイノー↓
 U : ウン
 Y : ⑧アレヤ アノ ゲンニ アノ ミテ イイツタエ
 テキタンジャデノー↓ (S氏に対して)
 S : アー

(2-5) 考察

(2-4)の談話箇所(1)の①、②からは山本氏(Y)、植中氏(U)共にガロボシによる被害を避けるために行っているこの地域の風習が伺える。熊野市史編纂委員会(1983)によると近隣の小坂地区や桃崎地区等、熊野市一帯で「ガロボシの好物であるキュウリを栽培しなかったり」、「キュウリの初物を川に流したり」という風習が、かつては広く行われていたことが指摘されており興味深い。また、植中氏が談話箇所③、④でガロボシに引かれ亡くなったMさんやMさんのお墓の存在をささやき声で話すことや、⑤でお子さんやお孫さんにもガロボシに対する注意を与えていたことから、植中氏が昔も今も変わらずガロボシの存在を強く認識していることを感じられる。更には⑥～⑧でも山本氏、植中氏共に「ガロボシの存在が単なる迷信ではない」ということを強く主張している。

以上の点から現代の価値観において、非科学的で無駄な存在のように考えられ、それ故、排除されがちな「ガロボシ(河童)の存在」が山本氏、植中氏の中では、現在も普段の生活の中にならびに生きていくことが確認される。この点が現代の経済効率一辺倒の価値観からでは捉えられない正に「熊野の精神的世界の豊かさ」そのものであるように考えられる。そして、この精神的な豊かさは鈴木(2004)で指摘されているように、熊野の豊かな自然環境に育まれたものであることは想像に難くない。次節ではこの「熊野の精神的な豊かさ」の教材化を試みる。

(1、2章文責：余)

3. 指導案例 教科 -総合的な学習-

単元名「地域に残るガロボシの話」から学ぶ

(3-1) 熊野の自然と子どもたち

陸の孤島や最後の秘境などと言われた熊野も1960年代の高度経済成長の影響を受け、生活の現代化は、画一化された生活様式となって現われ、熊野固有の生活や習慣などがなくなっていった。勿論、自然も経済活動に左右されて変化していった。しかし、1974年の自然保護協会学術調査では、「カワウソが生きていたのではない」という報告があるほど、70年代にでも自然が豊かであったようである。また、当時の熊野の子どもたちは、自然の中で育っていたことが、請川小学校文集『清流』の中の綴方で現わされている。

現在の子どもの生活を見ると大人に管理された集団の中での活動や、自分の時間があってもそれはテレビゲームなどのバーチャルな世界で過ごすことが多くなっている。熊野の子どもたちにおいても全体としては、そのような傾向は変わらない。しかし、鈴木(2004)の中に取り上げられている綴方を見ると、子どもたちは、自然のめぐりの中で、自然に育てられているという生活をしていることが読み取れる。そのことは、現代社会の子どもへの育ちの難しさを解決する糸口を提供しているのかもしれない。

(3-2) 子どもの生活とガロボシ伝説

プールを持たない大又川流域の飛鳥・小阪・日進・五郷の各小学校では、夏になると子どもたちは川で水泳を行っている。それほど大きい川ではないが、瀬があり、淵があるので水泳には危険が伴っている。古老の人から聞き取りをしたことがあるが、川での水泳や水遊びの時の事故にあって命を落としたということは、僅かである。子どもたちの遊びの場となっている大又川には、あちこちの淵で、ガロボシの話が残っている。ガロボシの話に込めた、地域の人々の想いをこの教材を通して、学ぶことは、画一化された現在の生活における考え方に一石を投じるのではないかと考える。

(3-3) 指導計画(全2時間)

目標・地域に残るガロボシの話を知る

- ・ガロボシの話を伝えている人の想いについて考え合う

指導の流れ

第一次 ガロボシの話を出しあう。

第二次 ガロボシの話を伝えている人の想いを考える。

(第二次の指導案)

時間	主な活動	指導上の留意点
10	ビデオを見る。 感想を書く。	感想は次のことにしぼって書いてもらう 「ガロボシの話は、迷信じゃないということ」についてどう思ったのかを書いてもらう。(参照: 2節(2-4)の下線⑥~⑧)
10	話し合い1 水泳場である大又川の様子について話し合ってもらおう。	川のきれいなところや汚れているところ・瀬や淵の様子・昔と今の川の様子の違いなどを出し合いながら、大又川について、認識していく。
10	話し合い2 今は、どうして「ガロボシの話」がされなくなっているのかを話し合う。	「ガロボシの話」は迷信で、科学が発展したことで、消えていったのか、それとも他の原因で話されなくなったのかを考え、話し合う。
10	話し合い3 植中さんや山本さんは、どうして子どもや孫たちに不動淵のガロボシの話を伝えているのかを考える。	「不動淵は恐ろしいとか、一番しまいまで水遊びをしていたらガロボシにひかれる」などということを子や孫に伝える植中さん・山本さんの想いを考える。(参照: 2節(2-4)の下線⑤)
5	授業の感想を書く	

(3-4) 教材化するにあたって

2002年からスタートした新教育課程において子どもたちの「生きる力」の育成が課題とされている。この教育課程で示されるまでもなく、教育現場で子どもと接している教師たちは、子どもの育ちの困難さを実感していた。そのことを藤原和好(1991)は、『子どもが生きる文学の授業』において「幻の指標」という言葉を使って指摘している。

子どもたちが現実生活中に生活しているその地域に関する事柄を教材化することは、実感を持って生活することにつながっていき、その延長線上に「生きる力」の獲得があるのではないかと考える。

今回は、飛鳥町日進小学校区に伝わるガロボシ(河童)の言い伝えを教材化し、総合的な学習とした。地域には、その地域特有の言葉や話などが伝承されているのではないだろうか。それらを教育に取り入れることは、子どもの成長とくに「生きる力」の育成に大きく関わってくるのではないかと考える。今後、熊野の自然や文化が大きく取り上げられることになる中でそれを教材化していくことは、我々教育関係の仕事に携わる者にとって課せられた任務ではないかと思われる。

(3章文責: 鈴木)

4. まとめ

ここで今一度、2節(2-1)の暉峻(1990)で示された意見に立ち返る。つまり「(カネやモノを)持つことが、人間と人間との関わりを豊かにし、人間と自然との

関わりを豊かにできるような豊かさ」を得るために、本稿で目指したねらいは次のようにまとめられる。「物質的な豊かさ」の象徴であるデジタルビデオカメラやビデオ編集ソフト****を使ってできたビデオ教材をきっかけにして、「精神的な豊かさ」の象徴である熊野の人達の中での関わりや絆を深めたり、地元・熊野の自然やことば、伝説等を見直したりすることで、子どもたちに「生きる力」を身につけてもらうことである。

(4章文責: 余)

引用文献

- 1) 暉峻淑子『豊かさとは何か』岩波新書 1990
- 2) 鈴木幹夫『戦後生活綴方教育実践史研究—熊野における1950年代の実践を通して—』三重大学大学院教育学研究科 修士学位論文(未刊行) 2004
- 3) 熊野市史編纂委員会・監修五来重『熊野市史』1983
- 4) 日本自然保護協会関西支部『吉野熊野国立公園学術調査報告』1974
- 5) 本宮町立請川小学校文集『清流』1954.5~1958.3
- 6) 藤原和好『子どもが生きる文学の授業』部落問題研究所 1991

参考文献

- 1) 梶田叡一『教育課題シリーズ① 授業改革と通知表—絶対評価<目標準拠評価>の実践—』日本教育新聞社 2004

**** WindowsXPに内蔵されているビデオ編集ソフトの「Movie Maker2.1」を指す。

- 2) 暉峻淑子『豊かさの条件』岩波新書 2004
- 3) 日進小学校創立百年祭委員会編『百年の道程』日進
小学校百年史 1977
- 4) 三重国語教育の会編『豊かな人間認識を育てる 語
り合う文学の授業』藤原和好監修 1988

付 記

幾度の調査にも快くご協力くださった山本、植中、鈴木の各氏に厚くお礼申し上げます。又、何かとお世話になりました教育実践総合センターの先生方にも感謝申し上げます。尚、本稿は2003年度の「三重大学・若手研究者研究支援経費」を受けて行われた研究成果の一部である。